

平成 24 年度第 2 回国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会 議事要旨（案）

1. 日 時： 平成 25 年 3 月 26 日（火）10:00～12:00
2. 場 所： 国立情報学研究所 20 階 講義室 1、2
3. 出席者：
（委員）
逸村委員（筑波大学）、今井委員（東京大学）、森委員（京都大学）、栃谷委員（京都大学）、
関委員（慶應義塾大学）、林委員（科学技術政策研究所）、安達委員、尾城委員（以上、国立
情報学研究所）
（陪席）
首藤様（文部科学省）、根岸名誉教授、熊淵図書館連携・協力室長（以上、国立情報学研究所）
（事務局）
高橋専門員、馬場係長、吉田係長、松本係員（以上、国立情報学研究所学術コンテンツ課）
4. 議事：
 - （1） 前回議事要旨案について
安達委員長から、予め委員に連絡・確認済み。
 - （2） 平成 24 年度 SPARC Japan 事業の実施報告について【報告】
高橋専門員から、MoU の更新、ニュースレター、セミナー、国際連携活動、学会誌合同プロモーション、第 2 期報告書の刊行について、資料 2-1、2-2、2-3 に基づき報告があった。
 - （3） SPARC Japan 第 3 期事業のまとめ【報告】
高橋専門員より資料 3 に基づき、第 3 期の基本方針と 4 つの課題に対する活動、評価について説明があり、安達委員からの補足説明の後、下記の意見交換を行った。

最初に安達委員より下記のとおり補足説明があった。
 - ・ 高次コミュニケーションを実現するための取組みとしては、研究者に対するアプローチが上手くできておらず、理解を深めることが難しい状況。また学術出版に係わる編集者のコミュニティができれば、職業的にも確立され、出版活動がもっと良い方向に進むのではないかと期待していたが、現時点で組織化するのが難しい。
 - ・ 日本の学術誌の基礎的情報についてですが、OA など具体的な活動をする際に、必要な情報をどうするかということです。OA になると誰がどこに投稿し、どれくらい支払っているのか、その動向が判らなくなるのではないかと懸念があるので、そういった情報をきちんと把握しつつ、活動を進めたいと思う。また、国際活動のところでもでてきましたが、SCOAP³については国レベルの論文投稿数にて拠出金が算出されますが、国内問題に break

down すると期間ごとの論文生産数に応じて負担すべきであるという考え方もでてくる。このような情報がないと議論できないので、トムソンロイター等が提供するような情報だけではなく、把握できないような情報についても入手し、検討してゆきたいと考えている。

- ・国内学協会誌の発信力強化に関してですが、色々な方々によって見方が違うが、英文誌の電子化を頑張るとい時代ではなく、当然のこととして欧米の出版社なみの活動をして出版してゆくことが当然のこととなっている。その一方で状況は非常に流動的です。例えば、PTP は京大で出版され、その後物理学会、OUP にて世界に公開されている。SPARC の活動において、もともと日本の学会出版であったものが、海外の出版社にかわるというようなことは度々起こっており、紆余曲折は珍しいことではない。一番大きな出来事は文科省の出版助成の科研費制度が大きく制度改正されたことで、OA 出版に対する評価を打ち出した。今後学術出版にどのような影響を及ぼすか、良い影響で上手くゆけばいいのだが、その成り行きをリアリティのある観点から見てゆかなければならない。以上、私の仕事に携わってきた感想ですが、委員の皆様から少し振り返ってご意見いただければ幸いです。

➤ 1 番目の日本版 UKSG に関して進まないのは何故か。

- ・日本版 UKSG に関しては何もしていないわけではなく、編集者が共同しておこなうことが、結果的に将来につながるといった考え方や理解を持つことができる関係者や学会がまだ少ないのがひとつの原因にあるため、結果として組織形成が難しい。カウンターパートとして JUSTICE があげられるが、比較するとかなりプリミティブである。

➤ 安達委員の補足説明を受けて、今井委員より電子情報通信学会の状況について以下のとおり説明があった。

- ・2-4 においては SPARC の活動において、OUP とのトライアルを経たうえで、現状では再び独自路線、新しいプラットフォームを作って展開する選択をさせていただいています。英文論文誌のみでのトライアルでしたのが、学会そのものはさほど影響は受けなかったが、編集を担当している研究者や編集者には色々な負担をかけながら、トライアルをし、現状に至っている。一方でそういったことを通し様々なことを経験し、プラスの情報を得て、当初は SPARC の活動において、ELEX を運営。また線形分野、全世界的にもニッチなジャーナルである HOLTA(Nonlinear Theory and Its Applications)という雑誌を J-Stage のプラットフォームで展開している。また、昨年 6 月より Communication Express を手掛け、通信学会の母体であるコミュニケーションに関して ELEX と同様のものを出してゆくこととなった。このように多角的な事業展開ができるようになったのも、初期の SPARC の様々な経験から出てきたことだと思う。そういった意味では非常にありがたく思っていますし、英文論文誌のみにおいては、コンソーシアム契約等においてそれなりの実績をあげさせていただいていることに関して、感謝している。
- ・2-1 の「学術コミュニケーションの主役たるべき研究者が主体的に係わる機会が少ない」に関しては、学会の編集会議等でも新しい試み、現状の運営規模を保つ、国際性を保つ、

新しいジャーナルの刊行等に係わっていて、とてもよりもう一段高いレベルでのコミュニケーションができる研究者が多数出てきて、このような活動に加わることは至っていないのは事実。一方でこれだけの展開をはかりながら、限界も認識していて、財務的にも国内各学協会は会員数の減少に伴う、収入源の厳然たる事実を前に拡大路線を進め、現時点では新しいプラットフォーム、学界全体の持っている知能の集結を目指しながら、一方では巨額な投資を行っている。目の前の課題の対応に追われているのが現状。

- ・第3期に学会の著作権規程が全面的に改定された。機関リポジトリに関しては完全にフレンドリーなカタチで、出版社版をエンバーゴなしで公開して良いということになった。しかし、このことを大々的に宣伝しているわけではない。産業界の方々も多く参加しており、ご理解も改定を通していただいている。大学で学位規則の改定に伴い大学の研究者にとって著作権というものがボトルネックになってくる。東京大学の機関リポジトリに関しては、これから格段と重要になってくることを認識しつつ、学会としてはユーザーフレンドリーな著作権規程にすることの意義を認知してゆく段階である。

➤ 安達委員の補足説明を受けて、森委員より数学分野の状況について以下のとおり説明があった。

- ・数学の分野ではこのような議論にはなかなかついてゆけなくて、OA と言いつつ切られてしまうと、数学のようなスケールメリットのきかない、一つの論文の寿命が長いところでは、難しい。電子化に関しては SPARC Japan の恩恵で対応を進めることができた。昨年の12月数学誌出版の研修会をおこなったが、OA にしている、していないところがはっきりとわかれている。OA でないから商業出版社から出版しているかと言えば、必ずしもそうではない。日本の中には紀要などかなりの数のれっきとした学術出版誌があり、OA が増える中でどのような立ち位置を見つけてゆけばいいかはまさしく右往左往している。電子化の際の冊子体をどうするかは、大手出版社でも意見は決まっていない。ネットさえあればいい、冊子体は無くなってしまいうだろうとかなり前に言われたが、未だになくなっておらず、むしろ冊子体のほうが重要だという意見もある。どうなるかは分からないが、先ほどの UKSG までいかなくても、各誌が独立、現状維持できることが大切だ。

➤ 電子ジャーナルと冊子体は今後どうなってゆくのか。

- ・デジタルは便利だが、デジタルにばかりスポットライトをあてるのはどうなのかと思う。
- ・筑波大学として方針ははっきりしていて、図書館が基盤となる電子ジャーナルを購入し、プリント版に関しては各研究科の意向を最優先し、研究科でお金をどうにかしてくださいという格好だ。図書館としては頑張って冊子体は持つように取り決めをしたが、値上がり分をどれだけ負担するかということが毎年の当局との交渉になる。APC といった考えかたがない状態で、全体としての経費はどうなるかということで配分されている。
- ・東大も基本的にその方向で進んでいる。物理の先生が紙は必要だという話がでてました

が、今後は部局で負担しなければならない。図書館には IEEE の冊子体を引き続き買ってもらおう。どうしてかという CLOCKSS に入っていないので、なくなったらどうするのか。日本で唯一、冊子体を全部取っておかなければならないという論法をつかって説き伏せています。今のお話は東大でも同じようなことがおこっており、現状の課題をご指摘いただいたと思います。

- ▶ 第 3 期のまとめについて、これに関連する話題を栃谷委員より以下のとおり提供していただき、意見交換をおこなった。

今年の 1 月に京大が幹事をしている図書館委員会で、提案ということでセミナーを開催した。趣旨は学術情報流通の動きが激しく、把握しきれないので、基本的なことを overview するというおこなった。また先生方や図書館職員で比較的管理的な立場にある人でも現状をよく認識していないため、総会などではとてもプリミティブな質問が出て、ベースがあわない。議論が進まないことを繰り返していたので、今度は一度リセットして、ベースを合わせたいという趣旨でもあった。

海外から講師を招くのではなく、図書館関係者で詳しい人たちを招いて、購読モデルの現状と課題、OA 出版の動向、リポジトリの現状と動向についてとりあげた。参加者からは良い反応をいただき、継続的にこのようなセミナーをおこなってほしい旨希望をいただいた。

- ・ 90 名参加ということですが、参加者の地域分布はどのようになっているのか。
関東が多く 4 割程度、あとは全国からで、お一方が近畿でした。基本的に幅広くいらしていただきました。
- ・ 地方国立大学の特徴的な意見・質問等ありましたか？私立や公立などの弱小の大学となると、危機意識が高く、図書館界は何かしてくれるのか？という話があるので、質問してみました。
今回は特にありませんでした。

(4) SPARC Japan 第 4 期の事業について【審議】

高橋専門員から、第 4 期の基本方針の確認ならびに事業計画案と具体的なプロジェクト案を資料 4-1、4-2、4-3 に基づき報告があり、大きな変更点は SPARC Japan セミナーの企画体制とニュースレターの発行形態。また下記の意見交換を行った。

- ▶ 全般的に予算削減というプレッシャーの中で計画を考えているが、前期と比較すると削減した活動は、学協会のプロモーション等の支援をやめた。
 - ・ それは表には書きにくいことなのか。(4) のインフォーマルなかたちでは、SPARC の知見が今回の科研費の制度設計に反映されているので大きな成果の一つだと伝えたいと思うので、書いてはどうか。
 - ・ 文科省作業部会の議論のなかでは、我々の意見や考え方を申し上げているので、それま

で主張するべきかどうか分からない。今回の科研費制度改正に盛り込まれたことは事実としてかけると思うし、我々としては有難いと思う。

- ▶ かたちとして OA を前面に出した計画の立て方になっているが、実際の OA は様々な意見や考え方が混在するなか、図書館や研究者がどうやって行かなければならないかということ考えなければならない。我々としては理念を追うのではなく、リアルな動きを見ながら図書館、大学、研究者等と、お金が無い中でどのように対応してゆくかを考えてゆくスタンスが必要ではないか。

- ・ 対外的な説明をどうするのか。外から見た場合、OA 推進というのは今日日な意味でとられてしまう。先ほどの小さな学会の話や購読モデルはだめなんだというような印象を与えない外への説明が必要ではないか。OA の出版経費の負担にしても、エンバゴを設けた公開方法も、すべて OA に係わることであるといった、幅広い OA に関する情報を提供すべきではないか。図書館員などは購読モデルが基本的に「×」で、OA が「○」であるといった単純な考え方が見受けられるので、そこが気になる。
- ・ なぜ OA にしなければならないのかといった議論が飛んでしまっている。White House も国として OA は良いことだと主張するが、紆余曲折を経て連邦政府の助成金をうけた研究成果はという考え方が出てきた。単純にオープンにするのがいいことだと言った気楽な問題ではない。わが国の議論は得てしてこっちに流れてしまいそうで心配。
- ・ 中に非常に理念主義的な受け止め方をする人がいる。SPARC でいう OA はもっと広義な意味、プラグマティックなことも含んだ話だと思う。理念主義にとられると本旨からはずれ、誤解を招くのではないかと心配だ。
- ・ 日本の事情、small community の事情に関して、学術会議でやっている議論を少しだけ紹介すると、100 人位のコミュニティで、会費で論文出版を行っているようなところは、OA に対応することは極めて難しいという議論になっている。つまりグローバル対応をしつつ、ローカル対応もしましよと言うことを、このなかに盛り込んでいただけるとより OA に対する SPARC の活動がかなり進んでいる、深掘りしているという印象を与える。

- ▶ パイロットプロジェクトに関して

APC 負担システムが定着するかどうか分からない状況ですが、いくつかの出版社から提案があり、個別に対応するのではなく、組織的に実験してみてもどうかと考えている。案としては SPARC Japan の経費と大学図書館が用意した経費を併せて、大学の中で一定程度の論文を特定の雑誌に出すということについて、APC の補助をしますとアナウンスし、研究者に対する影響を見てみたい。こういうことをもう少し具体的にして、大学図書館と相談して進めてゆくことを、本委員会でネガティブな意見が無ければ、トライアルする方向で検討したい。

- ・ Nature や Cell に頻繁に投稿している人なので、そのような人たちがどのような反応を示すか見てみたい。

- ・ターゲットを絞り込むロジックをきちんとしないと、いらぬ誤解が生じる。
- ・まったく知らない人や投稿したことがあるような人等状況が違うし、何のため にこの ようなことを行うのかといったことも明確にしなければならない。
- ・オフレコの話だが、日本学術会議でも研究者の OA に係わる実態をおさえる予定で、個人的には協調してやってはどうかと。学術会議は広く聞かなければならないので、動向をつかんだ上で、こちらで **Life Science** に絞ってはどうか。あくまで個人的な考えだが、色々なところから調査がきてしまうと、ネガティブになってしまうのではないか。
- ・調査の方はスクリーンという調査方法で、東北学院大学の佐藤先生や千葉大の竹内先生が係わっておられ、何年かおきになされています。スクリーンの調査チームが、今後 OA がどれくらい読まれているのか、投稿されているのかといったことをアンケート方式でやってみたいとの話がある。

反対意見はなく、概ね委員の同意を得た。

➤ SPARC Japan セミナーに関して

- ・SPARC Japan セミナーは出版側の方、大学図書館の方が集まる場として、継続的に維持していきたい。少なくともこの頃のセミナーを見ると東京付近の国公立大学の係長クラスの方が集まっているようなので、そういった層の活動を刺激するのも重要であるし、そういう場としても使ってゆければと思う。これは具体的な活動なので、WG メンバーのお名前を想定しながら相談しつつ、進めたいと思う。それ以外に研究者の先生方にも多く参加していただきたいとも思っていて、個別にあたっているところ。

昨年度と同様、セミナーの開催と WG によるセミナー企画運営に関して了承を得た。

➤ ニュースレターの発行形態の変更。事務局としては印刷をやめて web 版にし、年報(冊子体)としたい。

- ・現状の冊子体の発行部数、予算等はどのようになっているのか。
基本的には大学図書館宛に 1 部、パートナー誌、学会に希望数、配布。もちろん web でも配信。1 号あたり 3500 部発行、予算はトータルで年間 800 万位。1 号あたり日本語 100 万、英語 100 万程度。
- ・コンテンツおよび編集方針は変わらないのか。
基本的にはセミナーの広報というかたちに変えたい。
- ・経費以外に何が大変なのか？
経費以外に企画が大変。これだけの人に依頼して書いていただき、こちらで編集をし、この形式にまとめあげるのは結構大変な作業だ。
- ・年報にすると変わるのか。
年報では依頼原稿は考えておらず、セミナーの記録等をまとめてゆくことを考えて

いる。その時々のもものについてのまとめが必要であれば、年1回、トピックスを選んで、年報の中で扱ってゆくということは可能かと思う。新しいニュースレターはwebチラシなので、このタイミングでこの方に書いていただきたいという希望があれば、A4の裏表程度を書いていただき、冠だけつけて出すことは可能。

- ・情報を探している人が見つけやすいようにしておく。検索にひっかかりやすくするのはよいことだ。
- ・基本的には結構だが、積極的に図書館関係者のニュースソース等にPRして欲しいし、研究者にもPRすべきだ。アクセスされないままにならないよう、注意することが大事。

印刷物の発行に関しては事務局の提案のとおりwebによる広報、年1回の記録を主体とした年報の発行となる旨、了承を得た。

最後に安達委員長から、以下の連絡があった。

委員の任期は2年ですが、この3月で任期が終了します。この2年間どうもありがとうございました。新年度の委員は現時点で白紙ですが、引き続きお願いすることもあるかと思いますが、その際は宜しく申し上げます。